

修士論文概要

氏名：柳井 明子

1. 論文題目

ベトナムにおける作業療法の現状 ―東南部地域での実践事例を中心に―

2. 研究背景

現在、ベトナム社会主義共和国（以下、ベトナム）は、急速な経済成長を遂げ社会指標の大幅な改善を達成してきた一方、貧富の格差の拡大、環境問題、平均寿命の延伸による高齢化等の課題が顕在化してきている。そのため、同国の保健医療や社会保障分野では、ニーズに合わせたサービスの拡充の一つとして、リハビリテーションの需要が今後も高まることが予測される。

これまで、ベトナムのリハビリテーション領域の専門職は、理学療法が中心的な役割を担っていたが、近年では作業療法への関心も高まり、理学療法に加え作業療法の位置付けが示されはじめている。加えて、中央レベルや省レベルの病院の多くに、リハビリテーション科の設立と理学療法部門及び作業療法部門の設置がされ、人材の確保が必要となっている。作業療法に関わる正式な体系的教育・資格制度体制は、整備途中のため教育の機会が限られており、これまで、諸外国からの協力を得て、理学療法士に対し短期間の作業療法研修を実施し人材が養成されてきた。近年では、教育体制の開発、人材訓練施設の奨励と促進、開発を進める方針が国内にて新たに定められ、養成教育等は変革の最中にある。

筆者は、2014年から2016年までJICA海外協力隊としてベトナム東南部の省立総合病院にて作業療法の技術指導の活動を行っていたが、作業療法へのアクセスの機会が公正であるとは言い難い現状を目の当たりにした。作業療法の実践の特徴は、治療媒体が「作業」という社会・文化レベル、環境面を含め対象者の健康的側面へアプローチができ、生活場面や文化的・社会的・経済的な領域に接点を持つことである。よって、彼らの文化や生活に即し作業療法のサービスに適正にアクセスできる状況が必要であると考えた。

開発途上国での作業療法の実践や教育において、作業療法の概念や原理が非西洋的・異文化的な環境に適用できるかについて多くの議論がされている。ベトナムの作業療法も、西洋文化圏および非西洋文化圏諸国の技術支援や教育支援を受けており、ベトナム独自の文脈を含めた影響を考慮する必要があると考えられた。現在、作業療法実践に従事している人材の多くは、先んじて制度化されてきた理学療法士であるが、ベトナムの社会や文化に沿いどのように作業療法を捉え、実践しているかその実態は、十分に明らかにされているとは言い難い。よって、ベトナムの作業療法がより効果的に実践されるため、どのような課題があるのか、ベトナムにおける作業療法の実践の現状を明らかにし検討する必要があると考えられた。

3. 目的

本論文は、作業療法の創始期にあたる中で、理学療法士たちが作業療法をどのように捉え、関心を持ちどのようなことを実践しているのか、また、これらの実践は、ベトナムの社会や文化に即し、患者の文脈に沿ってどのように行われているのかを、ベトナムの作業療法の実態の一端として捉え、ベトナムの作業療法の現状を明らかにすることを目的とした。

4. 方法

文献調査および事例研究を用いた。文献調査では、ベトナムの医療全体の変遷及び作業療法を歴史的、文化的、社会的、制度的な側面から概観し、ベトナムのローカルコンテキストの特徴を整理した。事例研究では、インタビュー調査を実施した。作業療法に関わる主なアクターとして、作業療法を実施する専門

職と作業療法の対象者を設定し、双方の視点からの語りを聴取した。それぞれの、文献調査及び事例研究の結果から、保健医療分野に関わる制度面、文化的側面の特徴、作業療法の実践者の文脈と患者および家族の文脈からみる作業療法を整理し、ベトナムの作業療法の実践の現状を結論づけた。

5. 論文構成

第1章 序論

1-1 研究の背景と問題の所在

1-2 研究の目的

1-3 研究の方法

1-4 論文構成

第2章 ベトナムの保健医療の現状

2-1 ベトナムの一般概況

2-2 ベトナムの医療提供体制と保健行政の機能

2-3 理学療法士および作業療法士の専門職教育体

2-4 ベトナム国内での障害者、高齢者の生活現状

2-5 小括

第3章 ベトナムにおける作業療法の現状

3-1 作業療法の概念形成及び歴史的変遷

3-2 作業療法の概念と理論

3-3 欧米諸国以外での作業療法の実践の現状

3-4 小括

第4章 ベトナムの東南部地域における作業療法の実践の事例研究

4-1 調査概要

4-2 調査対象地域のちり及び一般情報

4-3 インタビュー対象

4-4 結果

4-5 小括

第5章 全体考察

5-1 作業療法に関わる専門職の視点における作業療法の実践の範囲と特徴

5-2 患者からみた作業療法及びリハビリテーションの実際

5-3 ベトナムの文化から捉えた作業療法の適用

5-4 ベトナム国内の作業療法教育の動向

第6章 結論

6-1 ベトナムの作業療法の実践者の特徴

6-2 保健医療分野に関わる制度面におけるベトナムの文脈の特徴

6-3 患者および家族の文脈からみる作業療法

6-4 今後の課題と展望

6. 論文の概要

本論文の意義は、ベトナムにおける作業療法分野が近年、制度的・教育的な側面にて変革を迎える中、ベトナムの独自の制度や歴史及び文化的な文脈を含め、作業療法の実践を専門職と患者の双方の視点を用い実践の一端を整理し明らかにしたことである。加えて、国際協力の場において異なる国や地域に作業療法を導入し普及する場合に、概念と実践が、現地にとってはいかなる「外的要素」を有し、現地における文化的な文脈での実践にどのような影響を与え、どのように展開される可能性があるのかを考慮する必要があることを副次的に示唆した点である。

まず、本論文における問題の背景と研究方法を第1章にて示し、第2章から第3章にて、制度面や歴史、文化的背景の整理を行った。第2章では、ベトナムの保健医療を取り巻く現状を、近・現代史から医療の沿革を整理し、作業療法を含むリハビリテーション分野の社会的位置付けを制度的な側面を介し整理した。また、障害者や高齢者などの制度的・文化的・社会的な側面における概況を整理した。現代の医療制度は、フランスからの独立戦争に始まり、ベトナム戦争による影響を受け変遷し、障害者等は制度及び伝統的な考え方により、責任は家族に依拠していた。これらは、ベトナムの社会と文化的な文脈の理解においては重要な視点であった。続けて第3章では、ベトナムの作業療法の変遷を整理した。まず、欧米の作業療法の変遷を中心に作業療法の概念形成の変遷を整理し、作業療法の定義および概念を概観した。次に、日本とベトナムにおける作業療法の変遷を並置し、ベトナムの作業療法の変遷を理解する補助的な役割として整理した。これらは、ベトナムの作業療法が、西欧諸国および近隣のアジア諸国などの技術協力のもと、どのような理論や概念に影響を受け、作業療法を実践しているかを検討するものとして位置付けた。作業療法は、西欧諸国の社会や価値・規範を背景に実践と理論が発展し、非西欧諸国では、戦争を背景に欧米諸国との接近を通じて作業療法が流入し、身体障害の領域を中心に実践が発展した。また、ベトナムでは、特に、制度が先行し諸外国の協力のもと実践が先行し、その後、養成教育の制度の検討へと発展していた。

第4章では、第2章及び第3章までに文献調査から整理した作業療法を取り巻く現状をもとに、ベトナム東南部地域の作業療法の実践の事例研究を実施した。作業療法に関わるアクターは、作業療法に関わる専門職および患者とその家族と設定し、それぞれの文脈から得られた語りを事例に、ベトナムの作業療法の実態の一端とし、多面的に捉えることとした。インタビュー調査は、2023年8月に現地にて実施した。調査対象者は専門職及び患者を含め全17名であった。専門職側は、作業療法を専攻している学部生、理学療法士、教員、作業療法の研修を受講中の者12名であった。患者側は、患者3名とその家族2名であった。使用言語はベトナム語と基本とし、捕捉的に英語もしくは日本語とし、半構造化インタビューを実施しICレコーダーを用いて録音し、逐語的に記述を行い分析した。

第5章では、事例研究から得られた結果を、第2章及び第3章で得たベトナムの社会的・文化的背景・保健医療制度の側面・社会における障害の捉え方・作業療法の社会的な位置付けを含む特徴を援用し、事例研究の考察を行った。分析の視点は、作業療法に関わるアクターを「教育者、実践者、学習者、作業療法の対象者である患者とその家族」と設定し、それぞれの文脈から得られた語りを作業療法の実践の特徴と位置付けることとした。まず、専門職側の文脈では、「患者や家族などが社会参加、人と環境との関係性に注目すること」などを重要な点と述べた療法士の多くが、諸外国の作業療法士との協働した経験を持っていた。一方で、学習者の一部は、理論や概念を知識として理解しているものの実際は、理学療法の一部として補助的に実践するという語りが得られた。次に、患者側からの視点では、作業療法と理学療法を明確に認識しておらず、作業療法を理学療法の一部として捉えていた。しかし、印象レベルでは理学療法との「違い」を感じていた。加えて、患者は、機能回復に対する期待をもつ一方で、リハビリテーシ

ョンの場を、患者同士の交流の場として捉えていた。また、療法士の直接的な介入に限らず、作業療法を受け生活が変化したことを効果として述べていた。このほか、療法士が働く環境では作業療法に限らず、リハビリテーション分野に従事する人材の不足と人材の偏りが生じていることがわかった。

第6章の結論では、文献調査及び事例研究の結果から、「ベトナムの作業療法の実践者の特徴、保健医療分野に関わる制度面におけるベトナムの文脈の特徴、患者および家族の文脈からみる作業療法」を論点として整理し、ベトナムにおける作業療法の実践の現状を結論づけた。また、ベトナムの実態にあった作業療法が展開されるには今後、どのような課題があるのかを検討した。

ベトナムの作業療法の実践者の特徴では、政府が主体となり制度や体制が先行し作業療法の社会的位置付けられ始められている中で、諸外国による草の根レベルの技術支援や教育を受け、現場での実践と人材育成が行われていることが明らかとなった。中でも、実践の現場にて外国人の作業療法士と協働する機会の多い一部の療法士は、社会参加や具体的な作業療法の概念モデルなどの理論と概念を用いて実践を試みていた。また、外国人との協働経験が少なく、短期研修等後に作業療法を実施する療法士では、理学療法の延長として実践する傾向にあった。よって、作業療法の実践者の要請には、長期期間の養成期間を必要とし、理論と概念の理解をもとに実践を介した教育の機会を必要とすると考えられた。これらは今後、養成教育に関する課題と関連すると考えられた。また、これまで作業療法の養成教育は、外国人の講師を主体とした短期間の研修が行われてきたが、近年は、国内の教員による養成教育が進展し始めている。しかし、依然として、制度や教育体制は整備途中であり、一定数の作業療法士の数が確保されるまで今後も、多くの時間を要すると予測され、政府が主導する大学教育制度の段階的な整備と、海外からの協力を得た教育活動の両輪によって、作業療法教育が行われると考えられた。

次に、保健医療分野に関わる制度面でのベトナムの文脈の特徴では、医療提供体制や保健行政の機能がトップダウンで統括が行われている点と歴史的背景を含む文化的な文脈を踏まえる必要があると考えられた。患者および家族の文脈からみる作業療法では、まず背景としてベトナムの社会の障害者及び高齢者の位置付けの理解が必要であった。特徴として、障害者及び高齢者は、制度的な側面と伝統的な考え方である、家族機能の単位により位置付けられ、ケアなどの責任は、家族・近親者・社会扶助に依拠している点である。また、障害者及び高齢者への愛護的な関わりそのものに、役割や意味を持つことなどを理解する必要があった。その中で、作業療法・理学療法といった専門職の違いは認知されていないものの、リハビリテーションの経験を通し、「作業療法なるもの」を介し自身の生活に関わる重要なものと認識していた。また、機能回復への期待のほか、患者側が障害を持ちながらも社会に参加ができるようになったことを効果としている点、リハビリテーションの場そのものに意味や役割を持つことを確認できたことは、ベトナムの作業療法の意義を患者の文脈から改めて見出せた。

本論文の調査では、ベトナムの東南部地域に限局した事例研究のためベトナム全土で作業療法がどのように根付いているかは本論文の限界である。他方で、今回の文献調査と事例研究から、自国にない概念を用い文化の異なる文脈で作業療法を適用させる際に考慮すべき点について複数の示唆が得られたことは、副次的に得られた成果であった。これらの背景をふまえ、ベトナムにおける作業療法の実践は、諸外国の影響を受けながら、ベトナムの独自の制度や歴史及び文化的な文脈の中で、専門職及び患者の中で根付き実践が行われはじめていると考えられた。これらは、国内のリハビリテーションの創始期にあたる療法士たちの貢献に始まり、現代の多くの療法士が、諸外国の概念や理論を柔軟に受け入れ段階的に発展してきた結果である。今後、ベトナムの作業療法の実践者たち自身が、ベトナムにおける独自の文脈に即した「療法士」としての実践のありようを発展させていくことが求められると考えられた。